様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１６３０１
研究種目：基盤研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３４０２００７

研究課題名（和文）チャイニーズネスの実証的研究―グローバリズムとの関連から

研究課題名（英文）Empirical Research on Chineseness:From Connection with Globalism

研究代表者
中村　則弘（Nakamura, Norihiro）

愛媛大学・法文学部・教授

研究者番号：１０１９２６７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　12,600,000円

研究成果の概要（和文）：　現代における「中国的なるもの」がいかに構成され、その特性はいかなるものかを明らかにした。
　中国の少数民族、中国企業、中国武術団体、中国残留孤児、台湾・中国・日本の交流関係担当者への聞き取り調査、および中国国内でのアンケート調査から、両義性と流動性、曖昧さがチャイニーズネスの構成を考える上で重要な意味をもつことが解明された。またそれは、領域とネットワークの振幅というべき動態メカニズムに結びついていることが指摘された。

研究成果の概要（英文）：　Composition and characteristic of "the China-like thing" in the present age were clarified.
　(1)Some inquiring survey to Chinese minority race groups, Chinese companies, Chinese martial arts organization members, Japanese war orphans left in China and Taiwan-China-Japan civilian exchange group person concerned, and some questionnaire survey in China were carried out.(2)It was elucidated that, considering its composition, fluidity, ambiguity and fuzziness had important meaning.(3)Finally, it was pointed out that the characteristic was connected to a dynamic mechanism of the sphere and the network.

研究分野：地域研究,社会学

キーワード：チャイニーズネス　流動性　両義性　曖昧さ　境界移動　境界文化　価値意識

１．研究開始当初の背景

(1)チャイニーズネスについて、社会科学の面からまとまった研究は皆無といってよい。もちろん、「中国…」ないしは「中国的…」と題された研究は数多い。しかし、いずれにおいても「中国的なるもの」そのものへの位置づけがなされてはいなかった。

(2)代表者と分担者は，中国の社会・経済を一つの専門分野とし，グローバリズムのもとでの国民国家・市場経済への問いを共通関心としつつ、移動と民族、価値意識・民衆文化、底辺層・商人層，家族関係、地域社会，メディア・現代文化の調査研究を重ねてきた。そこで多くの課題に直面するなか，中国分析、アジア分析の大きな枠組みづくりと問題解決の方策提示の必要性を痛感してきた。一方、それに十分応え得る研究がないことへの焦燥の念にかられていた。そこで、問題軸を統合する基本枠として，チャイニーズネスとグローバリズムへの着目の必要が生じた。

２．研究の目的

「チャイニーズネスの実証的研究―グローバリズムとの関連から」は，現代における「中国的なるもの」を実証的に明らかにすることから、日本と中国、アジアと中国、世界と中国の間の摩擦や衝突を乗り越え、幅広い協調関係を構築するための基礎的枠組み、基本資料を、新たな社会構想との関連をふまえつつ提示しようとする。

３．研究の方法

文献調査、聞き取り調査、アンケート調査を実施した。

(1)文献調査についていえば、本課題にかかわる研究成果は、すべからく史的現実を見据えたものとなっており、それに関連して幅広く実施された。

(2)聞き取り調査は主として、ⅰ)中国の少数民族・回族の地域住民および地域指導者・宗教指導者、ⅱ)中国企業の経営者・従業員、ⅲ)中国武術関係者、ⅳ)中国からの帰国残留孤児および関係者、ⅴ)台湾宜蘭県と石垣市の現地居住者、漁業・行政・国際交流担当者、および北京の関係者に対して行われた。

(3)アンケート調査については街頭インタビュー調査とインターネット調査を併用する形で実施した。アンケート調査については、全国・地域を単位として実施され、街頭インタビュー調査は上海、広州、西安において実施された。さらに、グローバリゼーションとのもとでの国・地域間での比較検討の必要から、World Values Survey などのデータベースも合わせて利用された。

４．研究成果

現代における「中国的なるもの」がいかに構成されているかを、差序格局、両義的補完性、流動性と曖昧さを軸として分析した。そこではあわせて、グローバリズムとの関連における中国の周縁部分、外部との接触部分に着目して検討を進めた。

研究成果の主要部分は、専門学会誌である『日中社会学研究』において、2 年間にわたる特集論文、3 年間にわたるシンポジウム報告として集成された。また、日本・海外の学会・研究集会・ワークショップはもとより「ISA(International Sociological Association)日本大会」でも、関連する内容が報告されている。これら成果を中心に、以下、本研究課題で得られた知見を簡単に取りまとめて示す。

(1)尖閣諸島をめぐる日本・台湾・中国との関係を念頭に置きつつ、台湾宜蘭県蘇澳鎮にみるチャイニーズネスの現代的構成を、石垣島との交流、中国との関係を軸に分析した。そこでは、国家権力とは一線を画す、したたかな生き方がみられており、それはこれまでのエスニシティ研究にはみられない特性を示していた。端的にいえば、両義性と流動性、曖昧さと密接に結びついていたことであった。さらに中国社会の史的現実についての検討を加えつつ、それらこそが現代におけるチャイニーズネスの構成要素を考える上での基盤となることを明らかとした。あわせて、先に示した三つの国・地域の結び付きにかかわる史的検討および史的現実の聞き取り調査から、東アジアの共同関係は地域・民間における、文化的な個性を活かした弾力的なものこそが必要となるのであり、それは EU の在り方とは決定的に異なる内容のものとならざるを得ないという実践的な提言がなされるにいたった。

(2)少数民族、とりわけ中国、チャイニーズネスといわば「ネガ」のよう関わってきた回族について実証分析を実施した。イスラム思想の四大教学家である馬注の出身地である雲南省保山市を調査対象とし、歴史の発掘と地域の「発見」から、現地での地域づくりがなされてゆく一連の過程を実証的に検討することから、「言説の資源」、「地域」、「歴史の逆説性」が持つ意味の重要性とそれらが「共生の作法」という実践的な課題につながっていることを明らかにした。さらに、回族が民族として生成してきた「経路」からは、チャイニーズネスそのものが領域とネットワークの輻輳・振幅という動態メカニズムに結びついており、境界移動・境界侵犯・異種混淆がなければ本来的に立ち枯れてしまうという重要な知見を得た。

(3)中華民国期の中国武術の展開を素材として、それがなぜ、どのようにして「中国らしい文化」と見做されるようになったのかを解明しようとした。具体的には、中央武術館の

設立に関わるコンフリクトをめぐる一連の検討を行い、ローカルなコンテキストがナショナルなものに再埋め込み、転換されてゆく過程を捉えた。そのコンフリクトはまさに、チャイニーズネスの構築と関連しており、中央／地方、民間／国家、伝統／近代の立場の相違により、その定義と所有にかかわる象徴的な闘争を呼び起こしていたことに起因していたのであった。さらにそれは現代においても、ローカル／民間主体の伝統武術とナショナル／国家主体の競技武術の併存とチャイニーズネスという「文化遺産」をめぐるヘゲモニー争いとして残存していることが指摘された。

(4)「中国らしい」とみなされがちな「跳槽」という転職現象について、中国企業の経営者・従業員、企業組織を対象として分析が進められた。それは労働市場に関わる一定の経験知の蓄積に着目しつつ、企業の経営方式から中国的行動様式を探りあてようという試みでもあった。中国企業の経営形態と人材流動の類型設定と内容検討から、つぎの諸点を明らかにした。ⅰ)中国の企業組織では凝集力維持のために規模縮小や部門整理という弾力的な変化を「合理的対応」として常々行っていること、ⅱ)その一方で、経営者と従業員間で「感情交流」にもとづいて構築された「関係」が、経営者のある種の資産となり、従業員が離職した場合でも継続されていること、ⅲ)こうした「関係」のあり方が、「流動人材」の「跳槽」の基礎となっていたことである。こうした検討結果から、流動する人材にとって「関係」を考慮すれは、「跳槽」は合理的な行動となるのであり、そこに中国的な経営におけるチャイニーズネスの一断面を把握することができたのである。またそれは現代中国企業が、近代的契約にもとづくマネジメントが求められるなかにあって、伝統的ネットワーク様式を組み入れ、いわば集団の境界を曖昧化することで組織の活力を維持してきたという重要な指摘につながった。

(5)日本と中国の両社会で特殊なグループとしてトランス的なポジションとディアスポラ性をもつ「中国帰国者」に着目することで、チャイニーズネスやジャパニーズネスと密接に関わる国民性概念を問い直そうという大胆かつ有意義な取り組みを行った。それは「境界文化」に着目することで、本質主義的に枠付けられる「国民性」というある種の「罠」を克服することを目指すものでもあった。ⅰ)中国帰国者の歴史的経験、ⅱ)「再」包摂と他者化、ⅲ)境界文化における国民性の表出の変則性・多様性を、聞き取り調査結果から分析しつつ、何よりまず「国民」の可塑性と構築性を明らかとした。さらに、「中国帰国者」が日本人として生活しながらも、実践的必要から中国文化を戦略的に用いざるを得ない現実から、イマジネーション的な国民像に沿って、国民性と「～らしさ」を設定する分析視角は妥当性をもち得ないことを実証的に指摘した。あわせて、「境界文化」の検討は、多様性をめぐる共生・共存社会の構築に向けた新しい分析視角の創出に大きく寄与する可能性があることを提起した。

(6)アンケート調査である「チャイニーズネス調査」の実施とその分析検討である。この調査では上海を重点的な分析対象として設定し、現代におけるチャイニーズネスの構成を考える上で根幹的意味をもつ政治意識と価値観の関連を明らかとした。そこから、ⅰ)主要政府機関への信頼度は表面上は非常に高いが、無回答が多いなど他国にはない特異なパターンがみられたこと、ⅱ)生活に不満度の高い人の間で政府への信頼度が低いこと、ⅲ)政府への信頼度は、民主化や人権について批判的な態度と強い負の相関関係が見られる、というような重要な分析結果が得られた。また、ⅳ)金銭至上主義は政治意識と関係がなく、ⅴ)伝統的な儒教的価値観は政治主張を抑制する傾向に働いているという興味深い内容も明らかにすることができた。なお、国単位での比較検討には World Values Survey などのデータベースも利用されている。

以上の知見は、これまでの中国社会研究にはなかった独自の内容であり、世界的にみても、それを大胆に前進させるものとなっている。改めて、「両義性と流動性」、「曖昧さ」、「境界文化」、「境界移動・境界侵犯・異種混淆」が重要な意味をもつということは、従来の中国社会研究そのもののパラダイム転換にもかかわる内容であり、東アジアの協力関係を考える上でも、基本政策づくりの新たな枠組みを提供するものとなっている。また、アジアからの新たな社会構想を考えるための重要な基盤を提供している。なお、本研究課題にかかわる知見は研究協力者からものも得られている。一連の研究成果を専門図書として近々刊行するとともに、広く海外に向けて発信することが予定されている。その準備は整いつつある。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　16　件）

① 首藤明和、チャイニーズネスを構成する「言説の資源」「地域」「歴史の逆説性」―四大イスラーム漢文訳著家・馬注と雲南回族の「共生の作法」から、日中社会学研究、査読有、23 巻、2015、印刷中、ISSN 1340-5233

② 石井健一、中国人の政治意識と価値観―「チャイニーズネス調査」と World Value Survey から、日中社会学研究、査読有、23 巻、2015、印刷中、ISSN 1340-5233

③ 南誠、「中国帰国者」の境界文化における国民性の表出、日中社会学研究、査読有、23 巻、2015、印刷中、ISSN 1340-5233
④ 中村則弘、グローバリズムとチャイニーズネスに関わる分析視角―国民概念を超えたオルタナティブな枠組み―日中社会学研究、査読有、22 巻、2014、pp.1-5、ISSN 1340-5233
⑤ 池本淳一、グローバリズムとチャイニーズネスに関わる分析視角―国民概念を超えたオルタナティブな枠組み―、日中社会学研究、査読有、22 巻、2014、pp.6-16、ISSN 1340-5233
⑥ 中村圭、「中国企業」VS「流動人材」―企業戦略にみるチャイニーズネスの考察―、日中社会学研究、査読有、22 巻、2014、pp.17-29、ISSN 1340-5233
⑦ 首藤明和、現代中国家族の変化と展望、中国 21、査読有、40 巻、2014、pp.233-252、ISSN 1342-8241
⑧ 首藤明和、費孝通、社会と調査、査読無、12 巻、2014、p.104
⑨ 中村則弘、底辺階級からみる中国―グロテスクさに可能性を求めて―中国 21、査読有、40 巻、2014、pp.101-116、ISSN 1342-8241
⑩ 中村則弘、民衆世界の復権と東アジア共同体のオルタナティブ、日中社会学研究、査読有、21 号、2013、pp.19-26、ISSN 1340-5233
⑪ 中村則弘、両義性と流動性からみるオルタナティブな社会―グローバル化時代への東アジアからの問い―、21 世紀東アジア社会学、査読有、第 5 号、2013、pp.79‐90、ISSN 1883-0862
⑫ 首藤明和、ハイブリッドモダンの日中比較研究序説、日中社会学研究、査読有、第 20 号、2012、pp.9-20
⑬ 首藤明和、回族の宗教実践と「中国」、社会学雑誌、査読無、第 29 号、2012、pp.66‐85
⑭ 中村則弘、混沌と人間性―東アジアからのオルタナティブな企業活動に向けた覚書―、月刊愛媛ジャーナル、査読無、平成 24 年 5 月号 2012、pp.84‐87
⑮ 首藤明和、東日本大震災とその後―災害・復興・防災の日中比較を通じた新しい社会の模索、日中社会学研究、査読有、第 19 号、2012、pp.1-12、ISSN 1340-5233
⑯ 中村則弘、偶然への作法―東アジアの視点からみた東日本大震災と原発事故、日中社会学研究、査読有、第 19 号、2012、pp.13-23、ISSN 1340-5233

〔学会発表〕（計　25　件）
① 石井健一、中国人の政治意識と価値観―「チャイニーズネス調査」から、日中社会学会、2015 年 6 月 7 日、北海道大学・北海道・札幌市
② 中村則弘、追求≪小傳統≫為基礎的東亞連帶、高雄応用科技大学国際ワークショップ、2014 年 11 月 19 日、国立高雄応用科技大学・高雄市（台湾）
③ 中村則弘、区域発展的代替方案：依拠亜洲視角、高雄応用科技大学国際ワークショップ、2014 年 9 月 17 日、国立高雄応用科技大学・高雄市（台湾）
④ 首藤明和、The Hui People’s Religion Practices and “China”、The Asian Studies Association of Hong Kong（香港アジア研究学会）、2014 年 3 月 14 日、香港大学（香港）
⑤ 中村則弘、Reconsider the Asian Value、Asian Forum for Social Research and Practice(AFSRP) and IFSO、2013 年 12 月 8 日、成城大学・東京都・世田谷区
⑥ 首藤明和、東アジアのグローバリゼーションとその課題・展望、成城大学国際シンポジウム、「グローカル研究と多文化社会論の交点」、2013 年 12 月 8 日、成城大学・東京都・世田谷区
⑦ 中村則弘、底辺階級与流氓文化―在中国社会怪異性中尋求展望、日本社会学会、2013 年 10 月 13 日、慶應大学・東京都・港区
⑧ 首藤明和、The Future of the Hybrid-modern in Japan　日本的“金剛現代化”是怎様；社会或文化？―其特征与課題―、“現代性与当代人的精神生活”国際学術研討会、2013 年 7 月 28 日、吉林大学・長春市(中国)
⑨ 中村則弘、「小伝統」を基礎とした東アジ共同体にむけて―アジアからのパラダイム転換―、日中社会学会、2013 年 6 月 1 日、成城大学・東京都・世田谷区
⑩ 首藤明和、現代中国の「家族問題」―「家族圏」を通じた現状と課題の考察、日中社会学会、2013 年 6 月 1 日、成城大学・東京都・世田谷区
⑪ 中村則弘、東アジアからの理論構築：ファジー,混沌との関連、ワークショップ・チャイニーズ 2013、2013 年 3 月 29 日、愛媛大学・愛媛県・松山市
⑫ 中村則弘、Alternative Development Scheme from Asian Perspective an Emphasis on Mandalas and Chaos、East Asian Perspective and Alternative Development Workshop、2013 年 3 月 25 日、University of Lyon・Lyon（France）
⑬ 中村則弘、Asian Religiosity: The Religion in East Asia and a Shift of Value Consciousness、The 1st SFEM International Workshop on Social Change and Religious Transformation、2013 年 3 月 3 日、北海道大学・北海道・札幌市
⑭ 首藤明和、在村的潮流からみる明治期日本のハイブリットモダンの生成と展開―ハイブリットモダンの日中比較に向けて、長崎大学重点研究課題「東アジア共生プ

ロジェクト」、2013 年 2 月 22 日、長崎大学・長崎県・長崎市
⑮ 首藤明和、中国「回族」研究の課題と展望―移動・宗教実践・ハイブリッドモダンの視角から、日中社会学会(研究会)、2012 年 9 月 15 日、名古屋大学・愛知県・名古屋市
⑯ 陳捷、中国における経済文化と経済発展について、特別招待講演（中国韓山師範学院)、2012 年 8 月 24 日、韓山師範学院・潮州市（中国）
⑰ 石井健一、中国における物質主義価値観―広州でのアンケート調査から―、第 24 回日中社会学会大会、2012 年 6 月 3 日、立命館大学・京都府・京都市
⑱ 首藤明和、ハイブリッドモダンと日中比較、日中社会学会(研究大会)、2012 年 6 月 2 日、立命館大学・京都府・京都市
⑲ 中村則弘、両義性と流動性からみるオルタナティブな社会―グローバル化時代への東アジアからの問い―、グローバル化時代における人間と社会（シンポジウム)、2012 年 3 月 29 日、長崎大学・長崎県・長崎市
⑳ 中村則弘、社会科学に対する東アジアからの挑戦、中日経済社会発展論檀（フォーラム）(招待講演)、2012 年 3 月 27 日、首都経済貿易大学・北京（中国）
21 中村則弘、Social Transformation under the Influence of East Asia's Value Consciousness with an Emphasis on Mandalas and Chaos、全球化与東亜社会(シンポジウム)、2012 年 3 月 15 日、国立高雄応用第一科技大学・高雄市（台湾）
22 首藤明和、国際交流基金・国際円卓会議シリーズ「東日本大震災とその後―災害・復興・防災の日中比較を通じた新しい社会の模索」について、国際交流基金「知的交流会議助成プログラム」、2012 年 2 月 11 日、東北学院大学・宮城県・仙台市
23 中村則弘、擺脱東方主義与“渾沌”対中国社会変遷的涵義―探索一根据民衆文化対中国社会研究的分析框架、グローバリゼーションとチャイニーズネス(Globalization and Chineseness) 研究集会、2012 年 2 月 10 日、愛媛大学・愛媛県・松山市
24 中村則弘、民族間における対立回避と曖昧さ―中国の底辺階級の価値意識から―、宗教と社会階層(研究集会)、2012 年 1 月 7 日、北海道大学・北海道・札幌市

〔図書〕（計　4　件）
① 首藤明和、浙江大学出版社、「日中家族制度比較研究―親密圏的再思考与再構想」首藤明和・王向華・宋金文編『日中家族研究』所収、2013 年、総ページ数 28
② 首藤明和、「中国西南部・雲南の回族からみる地方的世界の構造―『自然村』（コアコミュニティ）と『社会圏』（接合的コミュニティ）に着目して―」藤井勝・高井康弘・小林和美編『東アジア「地方的世界」の社会学』所収、2013 年、総ページ数 28

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
中村　則弘（NAKAMURA, Norihiro）
愛媛大学・法文学部・教授
研究者番号：１０１９２６７６

(2)研究分担者
陳　捷（CHEN, Jie）
愛媛大学・国際連携推進機構・教授
研究者番号：００３８０２１２

首藤　明和（SHUTO, Toshikazu）
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：６０３４６２９４

石井　健一（ISHII, Kenichi）
筑波大学・システム情報工学研究科(系)・准教授
研究者番号：９０１９３２５０

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：

(4)研究協力者
南　誠（MINAMI, Makoto）
池本　淳一（IKEMOTO, Jyunichi）

中村　圭（NAKAMURA, Kei）
穐山　新（KAMEYAMA, Arata）